

令和6年度 とっとり学力・学習状況調査

報告書

一人一人の成長を支え
確実に伸ばす教育を目指して

令和7年3月
鳥取県教育委員会

目次

第1章 調査の概要と結果	
(1) 調査の概要	1
(2) 調査結果の概要	3
(3) 調査に関する Q&A	6
第2章 調査結果の活用	
(1) 個人結果票の見方について	11
(2) 主体的・対話的で深い学びの実施と 非認知能力・学習方略に関する分析について	14
(3) 帳票を活用した分析について	20
(4) 校内での活用方法について	24
第3章 分析シート（個人用・学校用）の活用	
とっとり学力・学習状況調査分析シートの 活用方法について	34
第4章 校内研究における活用	
米子市立加茂小学校	40
第5章 特徴的な学校の取組	
鳥取市立宝木小学校	50
鳥取市立青谷中学校	52
鳥取市立湖南学園	54
米子市立河崎小学校	56
米子市立尚徳中学校	58
第6章 客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進	
客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の 推進について	60
倉吉市教育委員会	62
倉吉市立打吹小学校	64
倉吉市立西中学校	72
岩美町教育委員会等	76
第7章 分析支援プログラムによる分析	
質問紙調査とのクロス集計結果より	78

第1章

調査の概要と結果

調査の概要や特長、結果について掲載しています。

また、調査に関するQ & Aも掲載しています。



鳥取県のマスコットキャラクター
「トリピー」

(1) 調査の概要

子どもたち一人一人の学力の伸びや学習状況を把握することにより、子どもたち一人一人の成長を支え、確実に伸ばす教育を進めます。

小中学校の時期は、子どもの「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育む大切な時期です。伸びる時期やスピードは様々ですが、一人一人は一步ずつ確実に成長しています。

とっとり学力・学習状況調査は、「学習した内容がしっかりと身に付いているのか」という従来の学力調査の視点に、「一人一人の学力がどれだけ伸びているのか」という新たな視点を加えることで、子どもたちの成長を促すものです。

鳥取県教育委員会では、本調査を通して、市町村（学校組合）教育委員会と協力しながら、ととりの子どもたち一人一人の学力を確実に伸ばす教育を進めていきます。



とっとり学力・学習状況調査の「3つの特長」

◆特長1

毎年の学力調査の結果を見比べることによって、1年間の学習の積み重ねを「学力の伸び」として見るができます。
※「学力の伸び」は2年目以降の調査から見るできるようになります。

◆特長2

質問紙調査（アンケート）の結果から、ルールやマナーを守る意識や、目標に向けて粘り強くやり抜く力などがどれだけ身に付いているのかが見えるようになります。これらの力は、学力と強く関係しているといわれています。

◆特長3

調査の結果から、学力を伸ばしている効果的な指導方法を明確にし、授業改善や児童生徒一人一人に応じた指導・支援をさらに充実させることができます。

令和6年度とっとり学力・学習状況調査の概要

- ◆期 日 令和6年5月15日（水）～6月6日（木）のうち任意の実施日
- ◆学 年 小学校・義務教育学校第4・5・6学年
中学校第1・2・3学年、義務教育学校第7・8・9学年
- ◆調査事項 国語、算数・数学、質問紙調査（アンケート）
※出題範囲は、調査を受ける前の学年までに学習した内容です。
- ◆結果の返却 令和6年10月15日（火）



とっとり学力・学習状況調査により、一人一人の学力の伸びを支援

とっとり学力・学習状況調査の特長

問題ごとに難易度を設定した学力調査を継続して実施することにより、子ども一人一人の学力の伸びを把握し、指導に生かすことができます。



◇全部で12のレベルがあります。(各学年で測定可能なレベルは7レベル)
◇1つのレベルをさらに3層(A～C)に分けています。

【埼玉県と協定を結び、共同実施を予定】

- ◇埼玉県は平成27年度から開始(毎年約30万人に調査)
- ◇一人一人の学力の伸び(変化)を継続して把握することのできる自治体初の調査
- ◇埼玉県は4年連続で全国学力調査の結果が伸びている
- ◇平成31年度から福島県と共同実施を開始
- ◇平成30年度プラチナ大賞で次世代育成賞を受賞
- ◇中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会(R1.10.29開催)において、本調査について報告

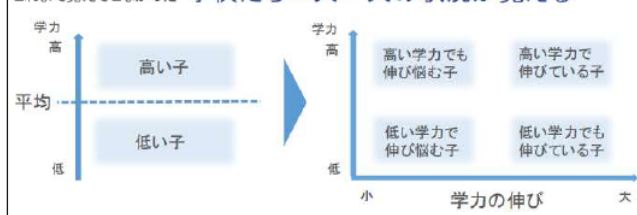
【項目反応理論(IRT)】

出題するすべての問題に同一尺度で難易度を設定

◇異なる調査間での学力の比較が可能

◇PISAやTOEFLと同様の調査手法

これまで見てこなかった 子供たち一人一人の状況が見える



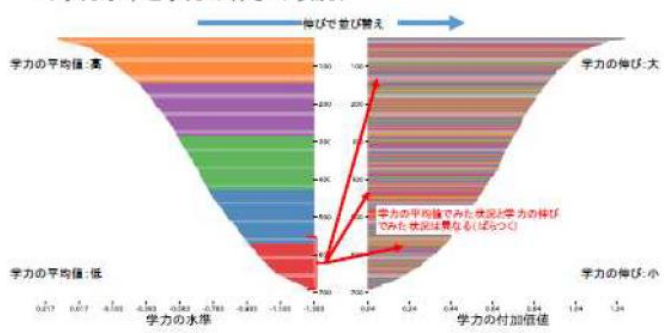
- 伸び悩む子どもには、つまづきを早期に発見し、支援が可能
- 伸びた子どもには、頑張りを認め、一層やる気を引き出したり、より高いレベルへの挑戦を促すための支援が可能

本県のスモールスケールを強みとした、児童生徒一人一人に応じたきめ細かな指導・支援の充実

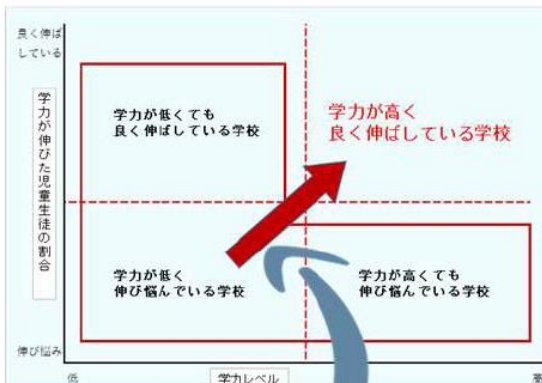


とっとり学力・学習状況調査により、市町村教委と連携して学校を支援

<学力水準と学力の伸びの状況>



**学力が高い学校が学力を大きく伸ばしているとは限らない
(学力が低い学校が、学力を伸ばしていない学校とは限らない)**



学力の伸びの状況

A校



B校



学校の実情に応じた重点的な支援

- 管理職の意識改革、マネジメント能力の強化
- 教員の意識改革、授業改善の推進
- 効果的な指導を実施している教員が多い学校
- 教科や学力層を問わず学力を伸ばしている学校

市町村の枠を超えて効果的な取組を共有する仕組みづくり



(2) 調査結果の概要

1 調査の目的

本県の児童生徒の学力や学習に関する事項等を把握することで、教育施策や指導の工夫改善を図り、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。

2 調査の特長

◇個人の学力の伸びを継続して把握することができる。

※学力の伸びが把握できるのは2年目以降

◇質問紙調査によって、非認知能力や学習方略を把握し、指導に生かすことができる。

※非認知能力：自己効力感、自制心、向社会性、勤勉性、やりぬく力

※学習方略（学びに向かうときの態度や学習の仕方）：柔軟的方略、プランニング方略、作業方略、認知的方略、努力調整方略

3 調査実施日

令和6年5月15日（水）から6月6日（木）までの期間で、市町村（学校組合）教育委員会・学校が設定した日

4 調査実施状況

（1）参加学校数 小学校103校・中学校47校・義務教育学校4校・特別支援学校4校

（2）参加児童生徒数 小学校・義務教育学校（前期課程） 12,700人

中学校・義務教育学校（後期課程） 11,933人

5 調査事項

小・義務教育学校第4学年から第6学年：国語、算数、質問紙（アンケート）

中学校第1学年から第3学年、義務教育学校第7学年から第9学年：国語、数学、質問紙（アンケート）

※学習指導要領に示された内容のうち各学年の前学年までの内容

6 埼玉県教育委員会との連携協定

本調査は、埼玉県教育委員会と締結した連携協定に基づき、調査問題の相互利用等をしながら実施する。なお、埼玉県では、平成27年度から埼玉県学力・学習状況調査として実施している。

7 調査問題の公表について

本調査は児童生徒の学力の経年変化を見とるための調査であるため、調査問題の内容については非公表とする。

【調査結果の概要】

- 国語、算数・数学とも全学年で順調に学力レベルを伸ばしている。
- 主体的・対話的で深い学びの実現、非認知能力・学習方略の数値において、概ね昨年度と同程度である。

【小学校】

- 国語・算数ともに、概ね順調に学力レベルを伸ばしている。
- 4年生時に学力に課題があると想定されていた現6年生は順調に学力レベルを伸ばしている。

【中学校】

- 国語、数学ともに、概ね順調に学力レベルを伸ばしている。
- 特に現1年生、2年生は、国語、数学とも学力レベルを2段階以上伸ばしている。

8 鳥取県の状況

(1) 教科に関する調査の結果

① 現学年別学力レベルの推移（学力レベルは、1C から 12A までの 36 段階）

※（ ）内は、前年度からの学力レベルの伸び

学年	国語				算数・数学			
	R3	R4	R5	R6	R3	R4	R5	R6
現小4				6-C				4-A
現小5	-	-	6-C	6-A (+2)	-	-	5-C	5-B (+1)
現小6	-	5-A	7-C (+4)	7-B (+1)	-	5-C	6-C (+3)	6-A (+2)
現中1	6-A	6-A (0)	7-B (+2)	8-C (+2)	5-B	6-C (+2)	6-B (+1)	7-C (+2)
現中2	6-A (+2)	7-B (+2)	7-A (+1)	8-B (+2)	6-C (+3)	6-A (+2)	7-C (+1)	8-C (+3)
現中3	7-B (+1)	7-A (+1)	8-B (+2)	8-A (+1)	7-C (+4)	7-A (+2)	8-C (+1)	8-B (+1)

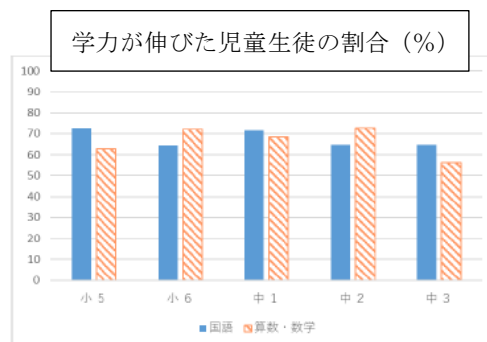
② 各学年の年度別学力レベル

学年	国語				算数・数学			
	R3	R4	R5	R6	R3	R4	R5	R6
小4	6-A	5-A	6-C	6-C	5-B	5-C	5-C	4-A
小5	6-A	6-A	7-C	6-A	6-C	6-C	6-C	5-B
小6	7-B	7-B	7-B	7-B	7-C	6-A	6-B	6-A
中1	8-C	7-A	7-A	8-C	7-B	7-A	7-C	7-C
中2		8-B	8-B	8-B		8-C	8-C	8-C
中3			8-A	8-A			8-A	8-B

③ 学力が伸びた児童生徒の割合（％）

※（ ）内の数値は、昨年度の児童生徒の調査結果

	国語	算数・数学
小 5	72.6 (87.7) ↓	62.7 (70.8) ↓
小 6	64.5 (78.9) ↓	72.1 (64.4) ↑
中 1	71.6 (65.4) ↑	68.5 (60.2) ↑
中 2	64.8 (66.8) ↓	72.7 (61.8) ↑
中 3	64.8 (55.8) ↑	56.2 (68.1) ↓



（２）児童生徒質問紙調査の結果（５が最高値）

学年	主体的・対話的で深い学びの実施	学習方略				
		柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	認知的方略	努力調整方略
小 4	3.8 (3.7) ↑	3.4 (3.4) —	3.5 (3.5) —	3.5 (3.4) ↑	3.8 (3.7) ↑	3.9 (3.9) —
小 5	3.7 (3.7) —	3.4 (3.4) —	3.5 (3.5) —	3.4 (3.4) —	3.7 (3.7) —	3.9 (3.9) —
小 6	3.7 (3.7) —	3.4 (3.4) —	3.5 (3.5) —	3.3 (3.3) —	3.8 (3.8) —	3.8 (3.9) ↓
中 1	3.8 (3.7) ↑	3.4 (3.5) ↓	3.6 (3.5) ↑	3.5 (3.5) —	3.8 (3.8) —	3.8 (3.9) ↓
中 2	3.7 (3.7) —	3.3 (3.4) ↓	3.4 (3.5) ↓	3.4 (3.5) ↓	3.6 (3.7) ↓	3.6 (3.7) ↓
中 3	3.6 (3.7) ↓	3.4 (3.5) ↓	3.5 (3.5) —	3.5 (3.5) —	3.7 (3.7) —	3.6 (3.6) —

※（ ）内の数値は、昨年度の該当学年の調査結果

学年	非認知能力				
	自己効力感	やりぬく力	向社会性	勤勉性	自制心
小 4	3.5	—	2.7	—	—
小 5	3.4 (3.6) ↓	—	—	—	3.7 (3.7) —
小 6	3.4 (3.4) —	3.1 (3.1) —	—	—	—
中 1	3.3 (3.4) ↓	—	2.9 (2.9) —	—	—
中 2	3.1 (3.3) ↓	—	—	3.3 (3.3) —	—
中 3	3.1 (3.1) —	—	—	—	3.7 (3.7) —

※（ ）内の数値は、同一集団の児童生徒の昨年度の調査結果

◆主な学習方略・非認知能力について

- ・柔軟的方略：自分の状況に合わせて学習方略を柔軟に変更していく活動
- ・プランニング方略：計画的に学習に取り組む活動
- ・作業方略：ノートに書く、声を出すといった「作業」を中心に学習を進める活動
- ・認知的方略：より自分の理解度を深めるような学習活動
- ・努力調整方略：「苦手」などの感情をコントロールして学習への意欲を高める活動
- ・自己効力感：自分はそれが実行できるという期待や自信
- ・向社会性：他人や他の人々の集団を助けようとしたり、人々のためになることをしようとしたりする力
- ・勤勉性：やるべきことをきちんとやることができる力
- ・自制心：自分の意思で感情や欲望をコントロールすることができる力
- ・やり抜く力：自分の目標に向かって粘り強く情報をもって成し遂げられる力

(3) 調査に関するQ&A

【Q1】

全国学力・学習状況調査と、とっとり学力・学習状況調査は何が違うのですか。

【A1】

全国学力・学習状況調査は、学力を平均正答率で表します。対象となる調査年度の児童生徒(小学校6年生、中学校3年生)のその時点での学力の現状を把握することには適していますが、実施年度が異なる調査の結果を比較するのが難しかったり、平均正答率を基準に考えるため個人や学校の学力の伸びを正確に把握しにくかったりするという課題があります。とっとり学力・学習状況調査では、異なる学年や年度間の問題の難易度を調整して学力を測定することにより、小学校4年生から、中学校3年生まで、個別の児童生徒の学力が伸びていく様子をより明確に示すことができるようになっていきます。

また、とっとり学力・学習状況調査では、質問紙調査によって、児童生徒の学力の下支えとなる「非認知能力」と「学習方略」の状況を把握することができ、学力の伸びと併せて児童生徒の学びの力を総合的に見ていくことができることも大きな特長です。

【Q2】

とっとり学力・学習状況調査の調査問題が、原則として非公開とされているのは、なぜですか。

【A2】

経年での伸びを測るために、同一の問題を年度を越えて出題する必要があることから、問題を原則非公開としています。とっとり学力・学習状況調査はOECDの生徒の学習到達度調査（PISA）や、TOEIC、TOEFLなどと同様の分析手法を使っており、こうしたテストでも問題は原則非公開となっています。

【Q3】

「学力レベル」とは何ですか。

【A3】

とっとり学力・学習状況調査では、様々な難易度の問題を出題し、それに対する正答や誤答の状況を見て、「学力レベル」を判断しています。そのため、全ての問題に難易度を設定しています。

【Q4】

問題の難易度は、どのように設定しているのですか。

【A4】

例えば、計算問題では、次の例のように難易度を設定しています。

問題の難易度	問題例
6	$0.7 \div \frac{2}{3}$
4	$5.6 \div 1.4$
3	$52 \div 4$

割り算に分数も入るため、難易度がさらに上がって「6」となる。

割り算に小数が入るため、難易度が「4」に上がる。

整数同士の割り算であるため、本調査では難易度を「3」と設定している。

【Q5】

「学力レベル」は、どのくらい設定されているのですか。

【A5】

学力レベルはレベル1からレベル12まであります。各学年の測定は、次の表のように7レベルの間で行います。また、それぞれのレベルはさらに細かく3層（高い順にA→B→C）に分かれています。児童生徒には、学力レベルをこの小さな層で分けた1-Cから12-Aまでの36段階で提示されます。

学年	学力レベル	学年	学力レベル
小学校4年生	レベル1～レベル7	中学校1年生	レベル4～レベル10
小学校5年生	レベル2～レベル8	中学校2年生	レベル5～レベル11
小学校6年生	レベル3～レベル9	中学校3年生	レベル6～レベル12

【Q6】

同じ正答率の場合、同じ学力レベルになるのですか。

【A6】

同じ学力レベルにならない場合もあります。

とっとり学力・学習状況調査の問題は、正答率が高いか低いかではなく、どの程度難しい問題に正答できたかでレベルが決まります。

例えば、AとBの児童生徒が同じ10問を解答した場合に、Aが一番易しい問題を1問間違えて、残りは全て正答し、Bが一番難しい問題を1問間違えたとします。この場合、正答率で考えると、AとBの学力はいずれも90%で同じということになりますが、本調査においては、より難しい問題に正答できているAの学力レベルの方が高くなります。

【Q7】

学力レベル7で考えた場合、小学校4年生の学力レベル7の児童と、小学校6年生の学力レベル7の児童の学力は、同じと考えてよいのでしょうか。

【A7】

とっとり学力・学習状況調査の学力レベルについては、学力レベルが上がるほど難しい問題を解く力があると考えています。小学校4年生のレベル7と小学校6年生のレベル7では、正答できる問題の難易度は同じです。

ただし、小学校4年生の学力レベル7の児童が小学校6年生のレベル7の問題を解けるかという、解けない可能性が高いです。これは、学習指導要領により学習内容が定められているため、小学校6年生のレベル7の問題を小学校4年生の児童は未習であるからです。

【Q8】

小学校6年生での学力レベルが3（小学校6年生の中では一番低い学力レベル）の場合、学力レベル3より下のレベルがつけられない状態になっています。

この場合の学力レベルは、どのような基準でつけているのですか。

【A8】

小学校6年生の調査において学力を測定できる問題の範囲は、レベル3からレベル9と設定しています。レベル3の問題に1問でも正答していれば、レベル3の学力がある可能性があるため、レベル3に位置付けられるようになっています。この場合、レベル3を明らかに下回るのは、正答数が0問の場合であり、その場合は、レベル自体が表示されないこととしています。

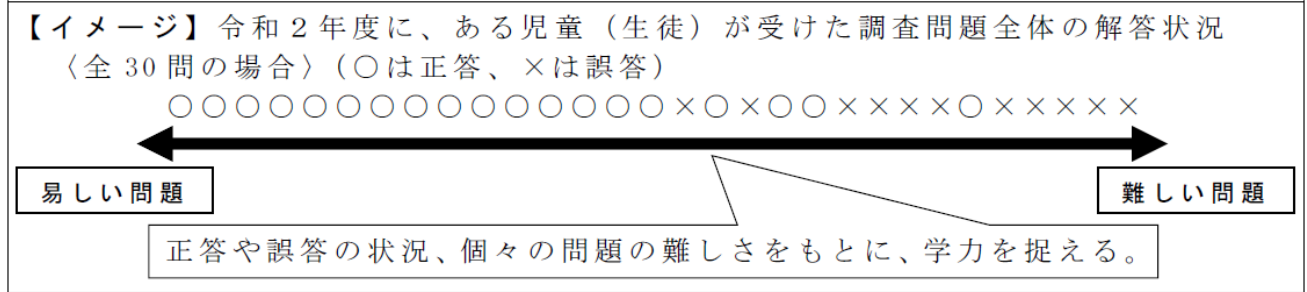
【参考】学力の経年変化(伸び)を見る調査の設計

参考資料: 令和2年度埼玉県学力・学習状況調査報告書(埼玉県教育委員会)

本調査では、実施2年目以降は前年度までの調査結果と比較して、各個人の学力の伸びを把握することができるようになります。Q&Aでも学力レベルや問題の難易度について触れていますが、より詳しい調査の設計についての資料を参考として掲載しますので、あわせてご活用ください。

(1)本調査における学力の捉え方

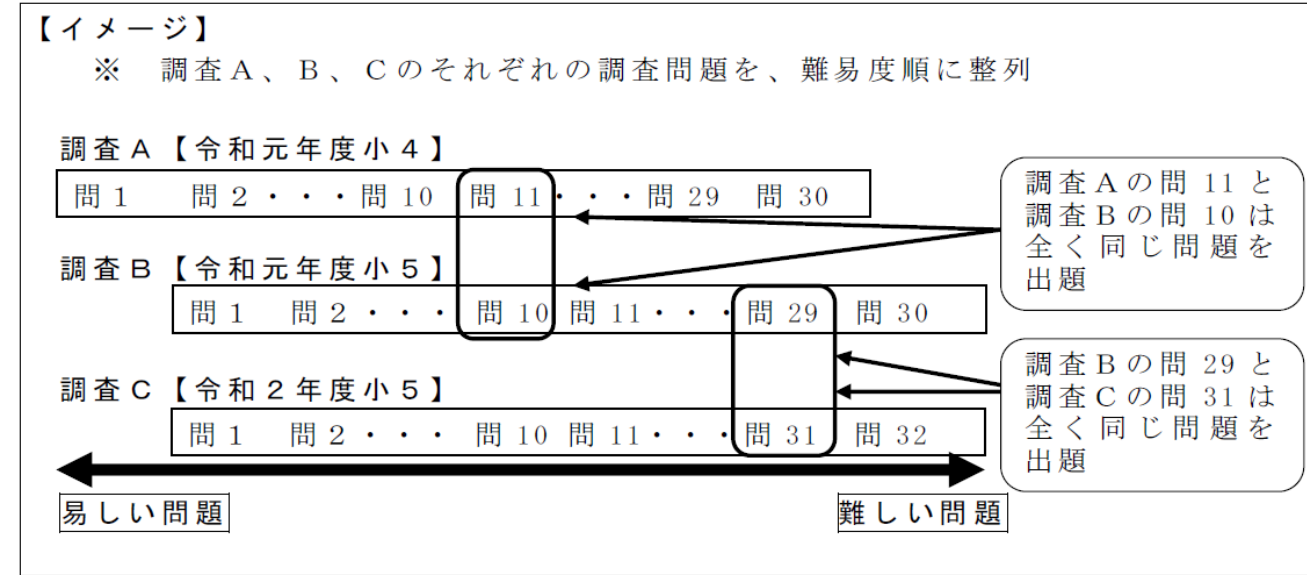
「どのくらい難しい問題に正答できるか」で学力を捉える。



- ア 学力の捉えについて
- 上の図のように、調査問題全体の中で難しい問題に正答し、易しい問題に誤答することもあるなど、児童生徒によって正答、誤答のパターンは様々である。そこで、どのような学力であれば、どのような解答パターンとなりやすいかということを、統計的手法を用いて推定し、その結果を学力として捉えている。
- イ 「問題の難しさ」で学力を捉える理由
- 全国学力・学習状況調査など、正答数(正答率)を学力の指標として使う方式は「いくつの問題に正答したか」で学力を捉えている。この場合、単一の調査の中で学力を比べることはできるが、小学校4年生と5年生など出題内容が異なる調査の結果から学力を比較することは難しくなる。
- 「問題の難しさ」をもとに学力を捉える方式は、次の(2)に述べる工夫をし、異なる調査の問題の難しさを比較可能にした上で学力を捉える。

(2)年度や学年で、異なる内容の調査結果を比較するための工夫

それぞれの調査に「全く同じ問題」を一部出題し、その問題への正答や誤答の状況を手掛かりとして、すべての問題について「難しさ」を比較する。

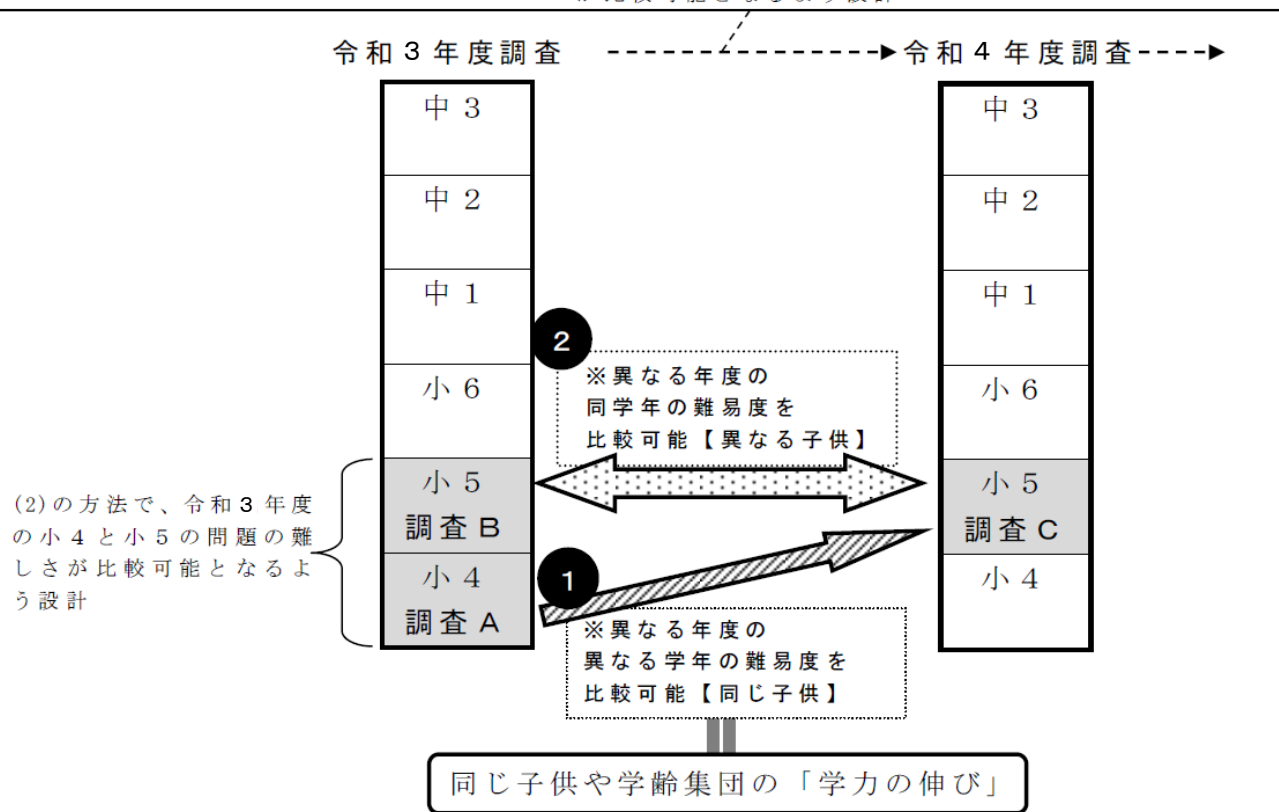


(3)とっとり学力・学習状況調査の設計

(1)、(2)に基づき、本調査では、以下のような調査設計により問題の難しさを比較可能にして、それに応じて学力の経年変化(伸び)を見ることとしている。

調査の設計【イメージ】

(2)の方法で、令和3年度と令和4年度の問題の難しさが比較可能となるよう設計



1 【同じ子供たちの「学力の伸び」】

- ・ 学年が上がった子供たちの結果を比較可能
(例) 令和3年度の小4と令和4年度の小5



2 【異なる年度の同じ学年の子供たちの結果】

- (例) 令和3年度の小5と令和4年度の小5

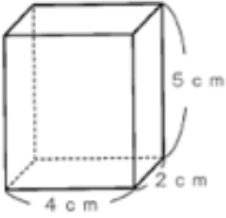
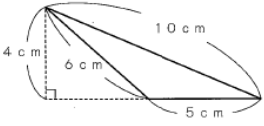


(4)本調査における「学力の伸び」の捉え方

ア 「難易度」について

本調査では、学力を「どのくらい難しい問題に正答できるか」で捉えるために、調査結果を分析し、全ての問題に難易度を設定している。

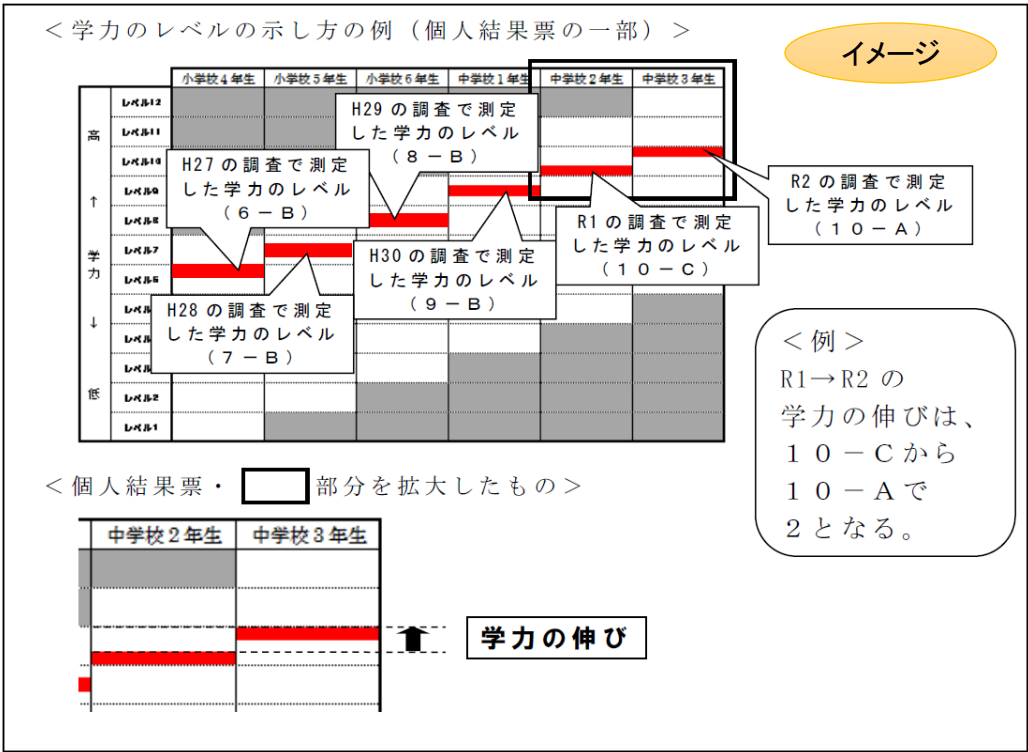
＜難易度の例 求積の問題＞

問題例	問題の難易度
次の図のような、 たて、横、高さがそれぞれ 2 cm、 4 cm、5 cm の直 方体の体積を求 めましょう。 	4 与えられた数値全て を使って体積を求め る問題である。 結果を分析し、問題 の難易度は「4」と なる。
次の図は、三角形の面積を求める ために、直線の長さを測って書き 入れたものです。 この三角形の面積 を求めましょう。 	6 与えられた数値から 必要な数値を取捨選 択する問題である。 結果を分析し、問題 の難易度は「6」と なる。

イ 「学力の伸び」について

本調査では、年度間の学力のレベルの差を「学力の伸び」と捉えている。下図は、個人結果票の一部を拡大したものである。児童生徒には、学力のレベルがバーの位置で示される。前年度のバーの位置と、今年度のバーの位置を比べると「学力の伸び」が分かる。

「学力の伸び」は学力のレベルを 36 段階に分けた中でのレベルの差で測っている。



* 今後、実施年数を重ねていくとこのような表になっていきます。